

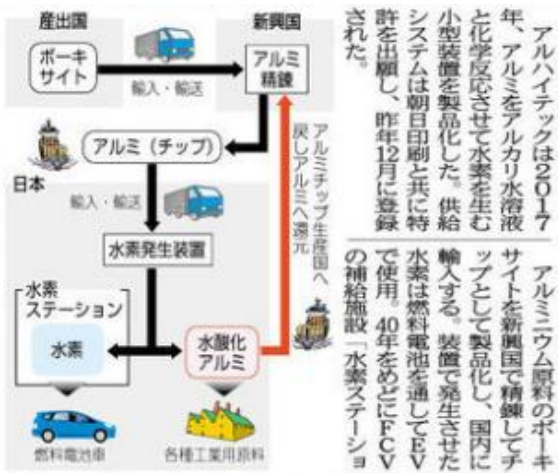
## アルハイテック

# アルミ活用 水素供給

## システム構築に着手へ

アルハイテック（高岡市オフィスパーク、高田和夫社長）は、アルミを活用した水素エネルギーのビジネスモデル構築を加速する。新興国で製品化したチップを水素を生成し、電気自動車（EV）や燃料電池車（FCV）で利用。副産物の水酸化アルミは再び精錬してアルミに戻す。脱炭素社会の実現に向け、今春にも関連の機関や企業と着手し、循環型の供給システムの実用化を目指す。

（高岡支社編集部・七瀬智幸）



アルハイテックは2017年、アルミをアルカリ水溶液と化学反応させて水素を生む小型装置を製品化した。供給システムは朝日印刷と共に特許を出願し、昨年12月に登録された。

アルミニウム原料のボーキサイトを新興国で精錬してチップとして製品化し、国内に輸入する。装置で発生させた水素は燃料電池を通してEVで使用。40年をめぐりにFCVの補給施設「水素ステーション」

にも普及させる。アルミチップでの輸送・貯蔵は水素と比べ、コストを低減できる。水素の場合は、高圧での圧縮や低温での液化などが必要だからだ。また、アルミから水素を発生させた際の副産物となる水酸化アルミは、凝集剤などの工業用原料となるほか、再び精錬してアルミに戻すことも可能だ。政府は脱炭素社会の実現に向け、温室効果ガスを30年度に26%削減する目標を設定し、水素エネルギーの推進を掲げる。同年に水素ステーションを900カ所、FCVを80万台、水素で走るバスを1

200台、フォークリフトを1万台普及させるシナリオだ。北陸では行政や経済など70

の団体が参加した「北陸アルミ水素将来ビジョン検討会議」が昨年、普及に向けたロードマップを作成。アルミが基幹産業である地域の特徴を踏まえ、工業利用だけでなく、災害時の非常用電源なども盛り込んだ「エネルギーの地産地消」のモデルを示した。アルハイテックはこれらの計画を念頭に、今春から連携する機関や企業と準備を進め、実用化に向けた調査・研究に取り組む。